

第33回 泌尿器科中部連合総会シンポジウムⅡ

自家腎移植の適応とその手術成績

司会：奈良県立医科大学泌尿器科学教室（主任：岡島英五郎教授）

岡 島 英 五 郎

司会のことば

自家腎移植は、(1)血行再建または尿管再建を目的とした自家腎移植術、(2)体外腎手術を目的とした自家腎移植術の2つに大きく分類され、その手術手技に関しては、1960年代後半から積極的におこなわれている同種腎移植術によって、血管および尿路合併症も少なく、技術的に問題のないことはあきらかである。しかし、自家腎移植術を適応する場合に、その手術成績が従来の手術方法による手術成績よりもあきらかによいということが大きな条件のひとつであることはいうまでもない。

Table 1. 中部地区における自家腎移植の現況（アンケート調査結果）

適応疾患	症 例 数	
腎動脈狭窄	46	44.7
腎実質内血管病変	8	7.8
腎腫瘍	0	0.0
腎結石	26	25.2
腎または尿管の外傷	1	1.0
尿管疾患	2	21.4
その他	0	0.0
計	103	100.0

アンケート調査

中部地区116総合病院泌尿器科

回答率：93病院（80.2%）

自家腎移植施行 有：20（21.5%）

無：73（78.5%）

今回、阿曾佳郎会長から本シンポジウムの司会の大役をお引き受けすることになり、中部地区（北陸地方会、東海地方会および関西地方会の各地区）において自家腎移植術がどの程度おこなわれているかを調査する目的で、中部地区内の大学および総合病院泌尿器科115機関にアンケート調査を依頼した。その結果は Table 1 に示すごとく、92施設からご回答をいただき、奈良医大を含めて93施設（80.2%）ときわめて高い回答率で、20施設（21.5%）において、103例について自家腎移植術がおこなわれていた（1983年5月末）。その適応疾患は、腎動脈狭窄が46例（44.9%）、尿管疾患23例（22.3%）、腎内血管病変8例（7.8%）、腎結石26例（25.2%）であった。5例以上の多数例の経験例のあるのは5施設と少ないが、これらの施設ではいずれも同種腎移植も積極的におこなわれている。

以上のごとく、自家腎移植術の適応疾患は比較的限られているが、各演者に自家腎移植術を適応したもつとも多い疾患を主題にして、その適応規準と手術成績などから検討した内容を発表していただき、これらの治療成績から適応疾患の選択規準、少なくとも禁忌だけでもあきらかにすることができ、今後 自家腎移植術をおこなううえでの参考にすれば幸甚のいたりと考え。

おわりに、アンケート調査にご協力を賜った各医療機関に心から厚くお礼申し上げます。

（1984年4月17日受付）